九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『けふの昔』と『正風俳談録』 : 俳書管見(二)・付翻刻『正風俳談録』

大内, 初夫
鹿児島大学教養部教授

https://doi.org/10.15017/10496

出版情報：文獻探究. 11, pp.1-13, 1983-03-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『けふの昔』と『正風俳談錄』

――俳書管見(二)・付翻刻『正風俳談錄』――

大内初夫

元禄後年に刊行された数多くの九州俳書の中で、すぐれた内容を持ち、高い評価を得ているのは朱拙編『けふの昔』であろう。元禄十二年に京の井筒屋勝兵衛から上梓された本集は、諸名家の発句を収録するのみならず、芭蕉の「十八樓の記」や「閉關の說」の俳文や芭蕉一座の「あれ／＼て」歌仙を収めており、更に十六項にわたる朱拙の俳論がまじえられていて、内容は多彩なものである。そしてそれゆえに、野田別天楼氏は本集を「当時の撰集中一頭地を抜くものがある」と高く評価している。

じっさい本集は、そのすぐれた内容のために、後年その大半に『奥菊随筆』(享保四年刊)巻頭の芭蕉・野坡両吟連句を加えて、『初便』と改題して『俳諧七部拾遺』の中に収められているし、またその俳論は、既白著『蕉門むかし語』(明和二年刊)や梨一著『もとの清水』(天明元年刊)などにも引用掲出されており、後代にかなり影響するところがあったように考えられる。

ところで、ここで言及したいのは、それとは別に、『けふの昔』と馬耳の伝書『正風俳談錄』との関係についてである。攬翠軒馬耳については詳しいことを知らないが、名古屋の月空庵澤露川の門弟であり、陸奥桑折の人である。『國曲集』によると、正徳三年露川が同地方に行脚した折、これに対面し師礼をとるに至った俳人らしい。年代が明確ではないが、享保年中かに馬耳は筑紫行脚に来遊しており、その折地方の俳人に伝授したものがこの『正風俳談錄』である。

本伝書は、いまだ紹介されたことを聞かないので、次に書誌的なことについて若干ふれておきたい。『正風俳談錄』の写本で管見に入ったものに次の二本がある。

(1)九州大学支子文庫本
(2)本庄弘直氏所蔵本

(1)は横本一冊。表紙共紙で題名の記載はない。墨付十七丁。内題「正風俳談錄」。印は巻初に「支子」、巻末は「支」の朱印があり、共に旧蔵者田村專一郎先生のものである。写者並びに書写年時は不明であるが、享保～延享頃か。

(2)は序文と本文は別に綴じられ、半紙本二。序文共紙表紙中央に「正風俳談錄」、左下に「秀山」とある。本文の方は二十二丁。共紙表紙左端に「發句敎」と記している。写者は共に本庄家の祖秀山である。秀山は、野坡の高弟塩足市山の長男で、塩足字七郎清俊といい、宝永七年の出生で、天明六年三月没、享年七十七歳。書写年時は不明である。

(1)(2)の相違については、後出の翻刻文によって明らかなごとく、それぞれ若干の脱字・脱文や誤写を有しているが、本文にそれほど極端な異同は見られず、お互いにかなり近い原本によって写したものであろうと見られる。本書の内容の詳細については翻刻文を掲げていることなのでここではふれない。

さて、本書を一読して特に注目されるのは『けふの昔』との関係である。次にそれらの箇所を並記してみよう。

（『誹談錄』）

○ むかしある人連歌師の宗長につけ句ハいかゝするかよきにや聞れ侍れは長の日上手の連歌ハ他人の中よきかことし表向は達けれ共下心よくつゞるにおのつから句ひあり下手ハ親類の中惡しきにゝたり表向はしたしけれ共下心よからすとかや申されしよしありかたきおしへなり芭蕉翁のつけられしは他人の中のよきとや申へき

○ 夫誹諧ハ日々夜々流行すれハ此境を工夫すへし此ミちの大祖なから宗鑑貞德をいまの世に用ひかたき流行の異なれハなり

（『けふの昔』）

○ 或人宗長に付句はいかゝし侍るかよしやと聞ひたるに上手の連謌は他人の中よきことく表向はとをけれとも下心よく付てをのつからの句ひあり下手のは親類の中わるきに似たり表向はしたしけれとも下心よからすと申されしとき、しこそめてたき教へなれはせを菴の付られしは他人の中よしとやいはむ

誰かしる往年の是ハ今年の非となり今年の非は來年の是とならん事を春は秋にあらすきのふハけふになし

……宗鑑貞德は此道の祖なれともいまの世に用ひかたきは流行の異れはなり來者の芭蕉菴を見む事も又しかならむ誰かしる往年の是は今年の非となり今年の非は來年の是とならむ事を春は秋にあらすきのふはけふの昔なり

○ 凡詞ハ以旧可用情以新先とは定家卿の示し給ひぬ山谷は換骨奪胎の法を立たるに誰か傳へしはいかいは平語の新しみを本意にしてあなかち古人の詞を用すと蕉翁の艶言舞妓の荒唐俚語俗詞ならねは俳諧ならすと此筋の魔境に落入るもの多し元より此道ハ俗によって眞趣を樂しむ事なれはいつれを是としいつれを非とせんしかもひたふるたゝにのミかゝわらさる詞新しくとも情致ハ古ひぬへし……

○ 詞以旧可用情以新爲先定家卿はしめしたまひ山谷は換骨奪胎の法を立たるに誰かつたへし俳諧は平話のあたらしみを本意にしてあなかち古人のことはをもちひすと芭蕉菴の示されしとて窮巷僻地には傾冶の艶言舞妓の荒唐俚語俗詞ならねは俳諧ならすと此筋の魔境におちいるもの多しもとより此道は俗によって眞趣をたのしむ事なれはいつれをか是としいつれをか非とせんしかもひたふる古へにのみ拘ラは詞あたらしくとも情致はふるひぬへし

○ 凡句は練るを惡しといふへからす一とせはせを翁ミノ斜嶺亭にまして

○ いつの比にかありけんミノ斜

亭にして
もらぬほとけふは時雨よ草の屋根
火をうつ音に冬の鶯　　斜嶺
一年の仕事は麦におさまりて　　如行
まことや此才三ハ十余句ほとせさせ給ひて（其）ののちあまり座のしめりたるは興なしとてこの句をすへられたるとかやしかれハおろそかならぬ事なり……

○　賈嶋は推敲の二字になやミ西行ハ風になびくの五文字につかれたまふといへり……

○　澄月や海にむかへは七小町
欲把西湖比西子　淡粧濃抹（埃）相宜
といへる東破（坡）か作例ならん

○　名人の古事をとりたるハ古人の力をからすして句中無尽のひゝきあり此境中分迄にて刻鵠類鶩（鶩）といへるにもあらさるへし

もらぬほとけふは時雨よ草の屋根　斜嶺
火をうつ音に冬の鶯　　如行
一年の仕事は麦におさまりて　　芭蕉
まことや此才三を十余句ほとせられて後座かしめりたりとて此句に決せられたりと其連衆のかたるをきゝぬ

○　賈嶋は推敲の二字になやみ圓位上人は風に靡くの五字につかれ給ふとそ

○　明月や海にむかへは七小町
としたふを……此句は欲把西湖（ハテ）比西子（ヲント）淡粧濃抹（カラン）相宜といへる東坡か作例によられたるへきを草〳〵に看過さむは本意なし

○　名人の古事をとりたるは古人の力をからすして句中無盡のひゝきあり此境中人分上のにらみたらはこと〳〵く先人の唾余にして刻鵠類鶩といへるにもあらさるへし

○　凡他の句を看ん事字眼を案へし

あつミ山や吹浦かけて夕涼
といふ句ハ吹の字にあたりてタすゝミ（と）せられたると見ゆれせに福の字なんとに書て發句と思へるハいと口おしゝ陶淵明か詩の神にして千古の名あるは秋菊有佳色といふ佳の字なりと聞し

○　散る花（を）南無阿ミた佛とタかな
其角か曰（ママ）に辭世と出しぬれとも神職の正統として守武なんそ此境をにらミ侍らん只落花に対してァゝと一時のなけきならんといへりさもありぬへし

○　梅か香にのつと日の出る暑かな
此句余寒の題なるよし句中寒の字なけれ共長夏にも寒かるへしこれや影畧の法とはいふへき杜甫か菊葭の題にて

暫時雪載花
幾處葉沈波

○　句を看事字眼を要すへし

あつみ山や吹浦懸てタすゝみ
といふは吹の字にあたりてタすゝみとはせられたりと見えたるを世に福の字を書なとして發句とおもへる口惜と或人のいへりさあるへし陶淵明か詩の神にして千古の名あるは秋菊有佳色といふ佳の一字なりときゝし

○　ちる花をなむあみた佛といふへかな
普其角曰荷兮集に辭世と出したれと神職の正統として此境をにらまれまし只落花に対して嗚呼と一時の歎ならむとさまあるへし

○　梅かゝにのつと日の出る山路かな
此句余寒の題なるよし句中寒の字はなけれと長夏にも寒かるへしこれらをや影畧の法とはいふへき杜甫兼葭の題にて

暫時雪載花（ヲ）
幾處葉沈（ム）波（ニ）

林和清が梅の詩に
　横斜疎影水淺深
　暗香浮動月黄昏
右の兩作見へし菊葭といわすと梅といわすして吟勢それとたしかなり是影畧の法也

林和清が梅の詩に
　横斜疎影水淺深
　暗香浮動月黄昏
兼葭といはす梅といはねとも吟勢それとたしかなり是影畧の法なり

右のように対照してみると明らかなごとく、『けふの昔』所収俳論の多くが『正風俳談錄』中に利用されているのである。それも『蕉門むかし語』のごとく、同じく『けふの昔』を引用しても、「詞以旧可用、情以新爲先と定家卿は示し給ひ、山谷は換骨奪胎の法を立たるに……とふるき人の語りしが」とか、「地獄天堂は學人の心なるべしとつくしの朱拙が書置しもさる事にぞ」とか、典拠がいくらかはっきりするような形で行なっているのではなく、明らかに剽窃と見られるような形での利用である。『正風俳談錄』の馬耳の自序によると、月空庵露川の説に燕說の俳諧を加え、更に正風好士の物語したことを添え書きしたということになるのであろうが、それにしても『けふの昔』の利用が大々的でありすぎるように思われる。行脚俳諧師が地方をめぐる場合、伝書はその収入の面で重要な役割りを担うものであったろう。しかもそれが、宗匠と地方俳人との私的な関係の上で伝授がなされるものであるから、俳諧についての高い見識や専門知識に乏しい宗匠にとって、自己の権威づけとして、このような他作の剽窃による伝書の作製は、まま行なわれたのではなかろうか。この『正風俳談錄』はそうしたことを考えさせる伝書であるので、あえてここに取りあげた。なお、『けふの昔』以外にも恐らく他作の剽窃があるであろうと考えられるので、次に全文を翻刻しておく。終りに本庄弘直氏並びに九州大学附属図書館に謝意を表します。

翻刻　正風俳談錄

馬耳著

凡例

(1) 底本には支子文庫本を用い、本庄氏所蔵本と対校した。
(2) 底本の欠字は・で示し、対校本のそれは×で示した。
(3) 対校本との異同は括弧して傍記した。
(4) 底本をなるべく忠実に翻刻するよう心がけたが、仮名は現行の字体を用いるようにした。

正風俳談錄

古(ふるえ)より俳諧ありといへとも世に盛ならさりしに山崎の宗鑑荒木田守武(もりたけ)なと史記滑稽傳によりてはいかいにもとつき行れ

しよりそのゝち難波の宗因出ていよ〳〵一轉
狂言不實の句の虚にはしり侍る其後
芭蕉翁出たまゐ始て古今集の誹諧
正風躰の骨髄あらわれ侍る　再昌院
季吟にて誹談あり酬和　湖春　素堂
はせを翁なりとかや正風躰の句・直・侍るハ×
　枯枝に烏のとまりけり秋の暮
これよりして蕉翁へ季吟の傳ます〳〵
熟せりとて當流は顯れ侍るとかやうけ
給りぬ
正風大祖風羅翁はせを居士滅後二十余年
の間異風國ゝへ流行して正道の斷續すへ
きをなけきて尾の月空居士國ゝを經廻り
尚東の風雅おほつかなしとて蚤蚊の呵
責も恐れず遙〳〵と此國へ杖を引給・し折
から攬翠軒に頭陀をおろして正道の
談義にこそ各異風邪気の衣を脱て專
正風執行の功ならん事をいのるといへとも
元より愚智暗昧のやからなれハ闇夜に
礫して寢鳥をうつかことししかあれは
今年のけふは勢陽の燕說納誹諧造立
の大願を起して一院を退き去し年ハ
月空居士の平包をたすけてしら・ひの
築紫迄かけあるき懇く正道の諸法に
うなつかせて制戒に及し門人千有余と
×かやいまた三越路の風雅もゆかしと龜田
坂田を經て北國に趣むとこの里に來ら
れしを居士のゆかりと聞はなつかしく
當連のたれ〳〵つとひ集り誹の奥儀を
探ルにその行のすみやかなる事流砂の流を
欺きそのあかる・事名月の海底を覗・より・
明し茶話夜會の度毎におもしろきこと
くさ筆をたのみたる反故共を集めてまた
是に正風好士の物語せし事を添書して是を
一帖となし名つけて誹談錄と呼なり
籠耳のやつかれなれは三子川を渡るの
たくひもありなんかしし・れとも他の
ためにせされハ後見の人ゆるさせ給へや
享保三戊孟春日　　攬翠軒馬耳
一それ發句といふものは虚實無一の處より
一物を起し一部の巻頭なれハ其趣向尤
向上たるへしゃ一切字を肝要と心得へし
切字といふは一句の余情の籠る處間答
差別して趣向の聞ゆるやうにすへし
切字のなきは位なふして發句にあらす
發句は平句より十段くらゐの高きをもつ
てけり其もの〳〵本情を見とゝけて新
古をわかち是を發句の魂として切字
のはたらきをもつてわつか十七字の
無尽の余情を含蓄するを十段の趣向
とはいふへし
一當流正風・誹諧ハ十段半の處に居て遊と
心得へしたとへハ梅を喰ふて乾・の
止ムハ勿論にして理屈たるへし　又梅を
見て乾・の止むハ其次也梅の噺に
乾を止るを以是等を十段とはいふへし
みな是古ミなり正風の變化ハそれより
半段立のほりて理屈をはなれてしかも
其梅より綱をつけて梅の本情をはな
れす諸題の難をエ夫すへし
一風姿風情あり風情今古不易柳ハ柔
和に牡丹ハ富貴なる菊の隱逸なるミな
情也
一風姿は其一段上にして富貴隱逸の
すかたを見出すを云也柳のしとけな
きに十八九の女を寄るは情なり姿ハ今
日其人のおかしき取なりの日ゝ流行する

處を見出して一作あるへし　誹諧は
常の俗語にして一曲をつけるをよし
とするなり理より出て新・くせんとおもふ
は此道の了簡違ひの人にして至極
の古ミなり是新しく我と我手に
理を付るゆへに外人の耳にいらす是を
誹談・行過ともに十一段ともいふて聞へぬ句多
かるへしよく〳〵十段より半段を風雅の
大綱をつけて姿にわたるへし姿の上にて
句に新古ハ分別なるへし　口傳

一正風躰の發句はすかたを七分情を三分を
心得へし情は理の發・にして不易に
近しかるかゆへ情を先にする時多くハ古ミ
に落ぬ日〻變化して日〻に新也たとへハ
四時に春夏秋冬と押うつりて一日も
同しさまならぬかことし風雅も其變化
のすかたに眼をつけて山川草木鳥
けたものに至・まて一日〳〵とうつりけるる
すかたを見出すへし是流行とハいふせ
しかれ共彼不易の本情大綱のしまりな
けれは虚言にはしり實なしまた
實に落入れは古ミに落勿論といふ句
のミ成へし虚言の間に一曲を立て句

作るへし是正風の當流とハいふせ

一誹諧は連歌の詞をやすらかに云ひ
たるものとこゝろへたる人多しさにハ
あらす哥ハうた誹は誹なり元來別〳〵
の物也何ほと詞あらけたり共趣向哥
ならは誹諧とは成かたし誹諧といふ
ものハ詩連哥に云れぬ處を拾ひあけて
此一道を立るものと心得へしたゝ今日の
俗語のつたなきを以て本意とすしかれ
とも其意味のつたなきハ風雅ならす
言葉・いやしきを用・て意味はやさしゝ
風雅を專・にすへきもの也

風姿の句　瓜むいたやうに寢ころふ火燵哉　圍友
風情の句　景清とあまへてかゝる火燵哉　燕說
　右兩句に・て味しるへし

人情　おれにいわしや先君か代の千ゝの春　季吟
　瓶を着て誰人います花の春　はせを
右兩句かんかふへしその人情季吟ハ祿おもき
情を述たりはせをは遊人の情を述給ふ
句に本情を專とす
　古池や蛙飛込む水の音　はせを
翁の仰ける此古池の五文字をのけて外の
五文字もあらはすへ候へとなり
　足音に　嵐雪
　山吹や　其角
兩人おもひ〳〵の五文字をすへて
翁うち笑ひ給ひて嵐雪か足音の五文字・
勿論の事也其角か山吹やの五文字・山
吹の情富貴なるものにしてにきやかなれは
うつらす予か古池やと置しは甚淋しき
情を一はいに述たりとの給ひし・かや
風雅なくてハあるへからす
　さつさ〳〵とおとる節季候
かやうの句きほひはかりに・て風雅なし是を
風雅にせん・ならは
　粟齒に嵐のさつさ節季候
かやうにして風雅なり尤七段の句たるへし
また爰に一句を見する也
　朝夕に蠅と姑の小鬪諍
はせを仰けるは全風雅なしとて小・さかひを
月に雲と御直しの由
句の廣きを手柄とす・せ
　宿札に假名つけしたる門柱　其角
翁仰けるは假名付したる門はしらとは
其身見立の趣向にして誰も云出すへしし

かれはせはし
宿札にかな付したも問れ顔
かやうにして其句ひろしたも問れ顔と
したるゆへに借宅なとのものか是非問れ
たかりての事と聞へ侍りてよきやと仰れしと・
句をつける事分別あるへき事也一とせ翁
行脚の折から難波の一席にて
前句
伯父の名をまんまと貰ふ真精者　諷竹
師走の月に海はたの家　青流
凝魚ねさする大年の雲　洒堂
翁もかしらかたむけてこれにやハと
小袖を出して着たる大年　翁
右・三句なから心ハひとつものにして良圓
神用金石のたがひめおよふへきにあら
す爰に正風の付句を見する
貫之か梅津かつらの花もみち
むかしの子あり忍・せておく
咽かかハかは爰に梅干・
山の名を大雲とりに小雲とり
蓬莱や岩に暮を打親父たち
日もなかひものとろゝする音
世の中はミな剃刀の上ぬめり

あゝと答て代脈にたつ
凡句をするには遊字・なきやうに心かけへし
わつか十七・字のうちに一字も無益の字
ありてハ無念の事也此句にて分別
すへし
しかなく信濃のそむ信玄
繪といふかありて百里も鼻の先
月空申されしハさる事なからありてといふ
假名遊ひ侍るかやうならハしかるへしとて
繪といふて已に百里も鼻の先
かやうにて遊ひ字の侍るへき事也
むかしある人連歌師の宗長につけ句ハいかゝ
するかよきにや・問れ侍れは長の日上手の
連歌ハ他人の中よきかことし表向は遠
けれ共下心よくつゐにおのつから句ひあり
下手ハ親類の中恥し・にたり表向は
したしけれ共下心よからすとかや申され
しよしありかたきおしへなり芭蕉翁の
つけられしは他人の中のよきとや申へき
夫誹諧ハ日々夜々・流行すれハ此境を工夫
すへし此ミちの大祖なから宗鑑貞徳を
いまの世に用ひかたき・流行の異なれハ
なり誰かしる往年の是ハ今年の非と

なり今年の非は來年の是とならん事
を春は秋にあらすきのふハけふになし
凡詞ハ以旧可用情以新・先とは定家卿
の示し給ひぬ山谷は換骨奪胎の法
を立たるに誰か傳へし
はいかいは平語の新しみを本意にしてあな
かち古人の詞を用すと蕉翁の艶言
舞妓の荒唐俚語俗詞ならねは誹諧
ならすと・此筋の魔境に落入るもの多し
元より此道ハ俗によって眞趣を樂しむ
事なれはいつれを是としいつれを非とせん
しかもひたふるたゝにのミかゝわらさる詞新
しくとも情致ハ古ひぬへし
句を作るの分別工夫すへし
利口・古身

火うちの音に萩の花散る
にせもの
火うち出せは萩の花散る
當流に・は
火うち袋に萩の花散る
此句にて分別すへし前の兩句ハ退て當
流の句は火うちて花のちるやらんまたは
火うち・袋かさわりて散ぬらんいろ〳〵に

きかるゝなりしかれは片よらすして其句
大にひろし
凡句は練るを惡しといふへからす一とせ・はせを翁
ミノ斜嶺亭にして
もらぬほとけふは時雨よ草の屋根
火をうつ音に冬の鶯
一年の仕事は麦におさまりて
まことや此才三ハ十余句ほとせさせ給ひ
て・ののちあまり座のしめりたるは興なし
とてこの句をすへられたるとかやしかれハ
おろそかならぬ事なり今比の俳人
五分線香三分せんかうなとにて句を
作・はやきをよしとする
凡句は五文字よく起して中文字五文字と
つらねて句となれり才一其起す處の
五文字分別處也
茶の湯の文や若楓
此句の五文字掛ものはと言類句なりしに
翁仰けるは・五文字ありぬへしとて
屏風に・
見せに來る　折ふしに
腰はりに
かやうに置て見て・末の五文字に決し給ぬ
折ふしに茶の湯の文や若楓

賈嶋は推敲の二字になやミ
西行ハ風になひくの五文字につかれたまふといへり
定家卿はいつも哥の五文字をのちにのミ
すへ給・ぬとかやみそし一文字のうちにてさへ
かくのことしわつか十七文字のうちなれハ至極
無益ならぬやうに心かけ・へきせ
折ふせて垣に結るゝ梅の花
これらの五文字益なしたとへなくとも垣に
結るゝ梅の花にて閑へたり此五文字をの
けて外にいくつもおくときにおかれ侍る
尤無益の事なり
おほつかなき事ともなり
趣向といふ・ハ無尽なり濱の眞砂と云しも
むへなるかな愁く眼を配り気をつけ
ぬれハ古哥古詩も轉し・至極の句と成
事多し　爰に蕉風の句をならふ
本歌
ほとゝきす鳴や五尺のあやめ草
あやめもしらぬ戀をするかな
此歌の上の句をとりて五月の月の字尺の
字に直して甚誹なり句也妙成かな
鷹一つ見付て嬉しいらこ崎
ほし一つ見付たる夜の嬉しさハ

月にもまさる五月雨のそら
はつ時雨猿も小簑をほしけなり
篠まけて花弓張おのわらハ
額烏帽子のほしけせけり
澄月や海にむかへはセ小町
欲把西湖比西子
淡粧濃抹総相宜
といへる東破か作例ならん
名人の古事をとりたるハ古人の力をからすして
句中無尽のひゝきあり此境中人分迄にて
刻鵠類鶩といへるにもあらさるへし
凡他の句を看ん事肝眼を案へし
あつミ山や吹浦かけて夕涼
といふ句ハ吹の字にあたりて夕すゝミ・せられたる
と見ゆれ世に福の字なんとに書て發句と
思へるハいと口おしゝ
陶淵明か詩の神にして千古の名あるは
秋菊有佳色といふ佳の字なりと聞し
散る花・南無阿ミた佛と夕かな
其角か曰　ママ　に辭世と出しぬれとも
神職の正統として守武なんそ此境を
にらミ侍らん只落花に對してアゝと一時
のなけきならんといへりさもありぬへし

梅か香にのつと日の出る暑かな（哉）

此（この）句余寒の題なるよし句中寒の字なけれ共（とも）長夏にも寒かるへしこれや影暑の法とはいふへき　杜甫か菊蕚（叢）の題にて

暫時雪載花
幾處葉沈波

林和清（靖）か梅の詩に

横斜疎影水淺深
暗香浮動月黄昏

右の兩作見へし菊蕚（叢）といわすと梅といわすして吟勢それとたしかなり是影暑の法也

ひゝきの句

行春を近江の人とおしみけり

降らすとも竹植る日ハみのと笠

紫穌（蘇）畑やきのふ死んたる猫の塚

青柳の龍頭にとまる烏かな

霧に風をむすふ句

朝霧のあちらに竹のあらしかな　月空（自）

此（この）句にてしるへし　（口授）

發（侍）句を見・るに切ぬ句世間に澤山なりそのわけをしらぬ人はいかさまに傳授のありての事たるへし恐れてこれを是（え）と思へり

口おしき事也　切字に甚子細ある事にてしれる人ならて（うて）知るへからす

捨假名に和らきそめて梅の花
おされては人の肩ゆく御迁宮
繼母の白ひ顔よりきしの聲
磯の月海士の子なれやかくれんほ・ふ（は）
右へとり左へつかふけふの菊
出代にあかぬわかれも候ひき
なからへて今さら恥をたねなすひ（更）（羞）（子）
庭噪く蜩啼ておかしかり
青嵐ならふ蘇鐵の常盤なり（かも）
立て舞ふ上戸の貝に散る櫻
浪人のたとへ喰ても冬の梅
今も尚袈裟か気相に春の雲
曰粽にほきて青すたれ（す）
三國の的ははつれそけふの月

右の外限りあるへからすおの／＼至極なりけらし尾の月空（自）居士攬翠軒に息絡し折から一連衆問て曰誹諧のさし合くるへき事御傘或はなひ草およひおた巻よせ書鷺水か大全等をもつて吟味するといへとも月うつり星へたてぬれは古書にも七句去とあるも當流に三句とし又（また）ハ

三句去とあるも付合にせしの類以（い）多し是等のくらき事其師にしたかはねはしれる事なく一生誹諧のくらきに迷ふて道をしらす居士連中のために此迷ひを明して明きに引（行）つきぬへき一枝をあたへたまへ（給）

居士ほゝ笑（日）て尤なり宗鑑貞徳よりの式目ありなからそのゝち好士達人なと（を）蕉翁の吟味さら／＼にして（まち）是ハ是とし非を非と定たり尚師につかへて（え）甚（其）功ならすはこのさハき分明に成ましかれともこゝろミ（心）・問（に）・へ余り（候）それに准すぬへき（ね）

問　星月夜として嵐雪其角等月に用すこれハいかゝ

答　侍るや童蒙・手引の誹書におの／＼正（の）月に用たり（の）やはり正・月にしてくるしからす件名所の星月夜にならぬやうに気をつけられ候へ（ほし）

問　梅は春の季なり雪は春もふり侍る雪の梅とこ侍らハいつれの季になり侍らんや

答　梅も春雪も春なから降れとも四季に分ぬれハ雪月花と賞翫重し此（この）重・にひかれて冬の句たるへし尚句の作によるへし（き）

問　人倫等のわけ古書に人りんになるとならぬと部を（む）

立てあり或は和尚の法印の代官の座當のなど
して人倫にならぬさたあり是ハくるしからぬや

答　人倫の事ハむかしより部分て置侍れと・おの〳〵人倫に
よりての和尚或・代官なれは古人の蕉門に可也
とせす幾度も遠慮すへし是等にかきらす

月次の月　正月より十二月迄の一ケ月〳〵を云
此月次に・明或ニ日の三日の十五・廿日などの類・つ
けても打越てもくるしからす
子細は天象の間さへニ句去也是ハ人によりての
詞なれハかまひなく外ハ是に准すへし
日ニ幾日の類三句去へし
しかしきのふけふと言ては同字にならす
依てつけてよししかれとも昨日今日明日と
いはゝ三句去なり外ハこれに准すへし
同字三句去といへとも別吟ハかまふ事なし
口授のことしたとへハ
御の字七句去也
しかし御門と言ハ御の字なから三句去
なり子細ハ帝とも云ゆへ也外この格也
不と不　同字ならす
しかれとも付句・遠慮すへしうち越かまひ
なしやはり手尓葉なり
不でがなとの事手尓葉なれとも嫌る
事ハ外の假名よりは耳たちて聞ゆる
かやへなり外是になそらへ
月次の影として正の月に用たり國曲集
のわき句を見るへし

127

問　不審紙傳受に光る湖月抄
連哥の席に照る吐月峯
此外霄闇として正ノ月に用るとはいかやうの事にや

答　おの〳〵合點なき事なりみな是俳諧のいふ所成へし
用る事なかれ殊更霄闇といふ事ハ月の出ぬゆ
へに霄闇なりしかれハ月いまたなし雲にかくれ
雨にかくれたりとも月の出てあらは月や霄闇ハ
一向月・なし

世に邪俳蟻のことくに群りておのれか管見にも
いろ〳〵の了簡をして是蕉門の口決なんと
詈り多くの人を迷ハす油斷すへからす

（問　はせを翁のつけ給ぬと言傳へ侍る
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
是等のいふかし）

韮のませ木に鳶を詠・て
鳶の居る笹のしの屋と詠しけり

答　これらの句今時の人のなんそすへきその
翁の心にならすはしれぬと知・へし蝦を
喰ふたる祖師佛を焼たる丹霞の類ひ
にして今こゝろの是悲云ふにたるへからす尚口授

134

同字別吟の事是亦口授のことし

し文字に三世ありといへともそのゝちに兩通して
まきらハしきも侍る是等の見やうハいかゝ・侍らんや

答　左方曰　咽にかよふしハ切る
舌に通ふしハ不切
大やうタに通ふし文字ハきらぬと知・へし
見て居れハタ日に咲し藤の花
今朝散し跡や淋しき藤の花
この兩句タにかよふなり
松高しタ日に咲る藤の花
これタ・通ふ事なしイキに通ふゆへきる也
音通の事大切の事にて侍る吉凶ハこれ
によるへしいにしへの連哥とて見侍るに
雪なからやま元霞むタかな
ゆく水遠く梅匂ふ里
川風に一村柳色見えて

137

いにしへはかやうにて悉才三・音通見へたり
豊前國松浦聖廟奉納千句
神法樂
松風の句ふ扉や濱の宮

色あさやかに御手洗の蓮
むつかしき顔は家老に備りて

古實東鑑

頼朝かけふの軍や名取川　右大將頼朝

みちのくやすむら退治の時・此句をなし給ぬ

残るとも羽柴は松の下木かな　家康公

此御句×尾州長筆御合戦の時なされし也此句

調伏の句として通音のさたなし敗北して討死す也

依　大權現うち勝せ給ひ秀吉公ともに

郡へめてたくかへらせ給ぬ　147

時々今天・下しる五月かな

此句・明智日向守むほんの心さし右大臣信長公を

うち奉らはやと思ひ愛宕山にのほりて連哥し

侍りぬしかれとも右の句習のたらぬ處の侍りて

山崎合戦の時×終に身に報ひ・たりぬ

紀貫之の句

親句珠句はいとゝしき和哥の大事也よく〳〵可秘也

×××

外下略

ほの〳〵となちの外山に來・鳴也

しましかたらへねくら定めん

凡席に望みて句を案しぬへき事幾度

轉してもいかぬ趣向ハ捨へしくりかえし〳〵×て

工まんとすれハその情うすくなれる事多し

一とせ居士東行の折から攬翠軒にての興行・

し給ぬ一巻爰にしるし畢ぬ

白川の關風見たり青あらし

時宜して通る旅の早苗開　147

四五間ハ龍骨車のはね飛付て

龍骨車の思ひ付よろし併才三の

句作に今少不足なれはとて御直し

龍骨車を大工まさりに作る覽

掃除寄麗にほしものゝ庭

ほしものゝ庭といふ所今少有へし庭と

いわすとも・・

掃除寄麗にけふ・干物

月見むと検見手代の郷に出る

此句風雅なし・て

月の雲手紙の奥をよミ殘し

鎌に飛つく虫のやさしき

此句手からもなく・ぬるし

薄刃に飛んて虫の大ちやく

猫の子の提緒にさるゝ菊畑

この處男ハ惡しとや前句女と見る也　147

依てさけをしるへからす

娵もまた大振袖の裾の露

それ來る鞠を僕かけて見る

前句女の句・この句よからす僕うるさし

それ來る鞠を此方てけて見る

世を渡る諸葉もあるに桶の箍

この句あまり眞すくにして一句風・なし

諸業と云すともしかるへし

・・・桶の輪竹をとり散し

りんきいさかい鍋釜の疵

この句つねにして風雅なしいく度もやす

らか成へし

・・・・・・・・・・・・

下紐の解てハ猫のとゝめられ

句作たらすもつ・も猫無益なり只下紐

はかりにてよし

下紐のむすふ間もなき年の浪

時斗ハいまた鐘かふる聲　157

脇の髭ぬき仕廻ふ玄關番

・趣向よししかれともぬき仕廻ふてハ

面白からすとて

脇を髭にぬき出す玄關番

守をおとすをもつて本守

冬近くひつそりと成る寺構

裕ひとつて律義六助

小謡も折にふれてハ花心

野菜分限と見ゆる若竹(ㇾ)

右のごとく一句〳〵の直し奇(寄)なる事也
此巻爰にしるしぬる事後者(有)のため
なり
凡付かた(×)八躰の事合點しながらひゝきと
いふ句うつろひと云句にも紛しき事侍る
その境の見へぬ事愚昧(愚見)なれはなり口おし
八躰の付かたの聞覚(聞覚)ぬるを筆まかせ・(て)
爰にならふ

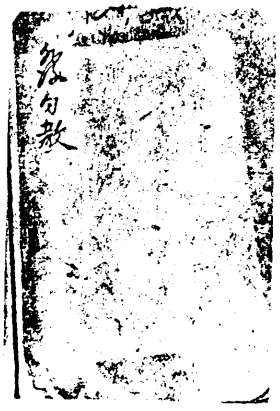
奥から順にとほす燈臺
アテ貝桶につゝくきぬ張玉くしけ
移(色)杉に間に花を見せかけて
峠を越すは遅られた馬
天気よし野ゝ川の瀬か鳴・(る)
ヤリつく鐘の供養の施主ハ誰しややら
月星の悴をきみに奉り
ヨセ(ヨセ)すくり立たる露の篠竹
高欄に明石の御方はつあらし
・龜(ヨセ)海棠のたよ〳〵と咲く
發句の寄句
雲林の死を聞て
わるひ(ふ)夢あふ夜ハ暑し花さくら(無證)

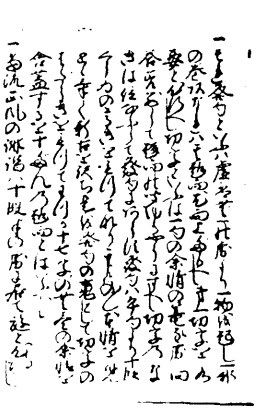
167

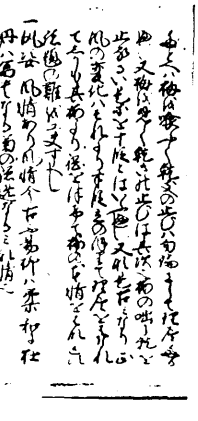
かたき寄(せ)・來る村松(雪)の聲
晨明(走り)のなしうち烏帽子着たりけり
かたなさす身を見れハひつくり
・其闇(同)さくらさ師走の事なれは
鎌ひとつ草刈ふこにはなれ牛
・天狗(同)の隠ミ行に必定
宿替の車長持引かけて
さても暑やと川へ飛込ム

167

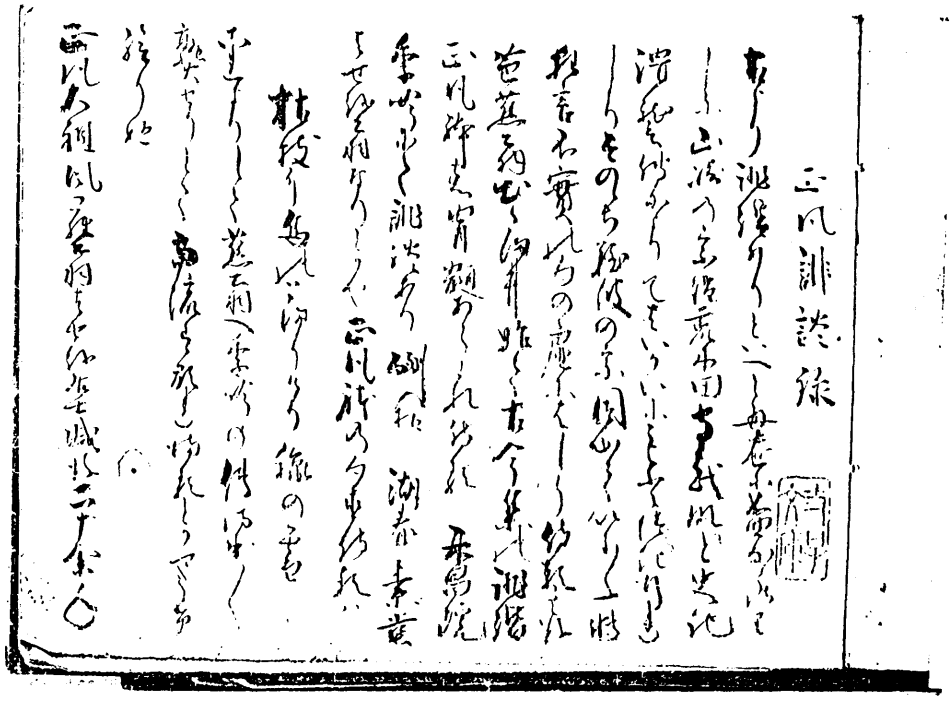
——鹿児島大学教養部教授——



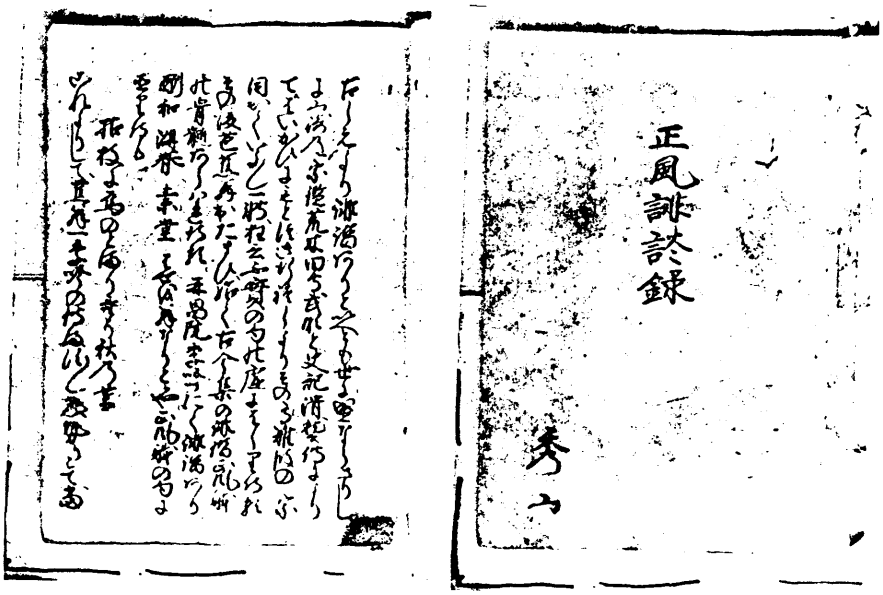




本庄弘直氏所蔵本第二冊表紙・巻頭



九州大学支子文庫本序文



本庄弘直氏所蔵本第一冊表紙・序文